

社員の皆様へのメッセージ

株式会社 イナテック

代表取締役社長 稲垣良次

2022. 2
No.342

今の試練を乗り越える時

今、イナテック試作開発部が喘ぎ苦しんでいます。それは、今まではお客様に恵まれて、実に順調に売り上げを確保してきました。

ところが、カーボンニュートラルにより電気自動車化の時期が前倒しになり、従来のA/T(オートマチックトランスミッション)開発が激減してきていることが要因の一つであります。

そして、お客様がグループ再編をされ、そのバランスを取るために内製化に舵を切られた事も要因として考えられます。

いずれにせよ、イナテックにおけるビジネス環境が大きく変わったわけです。我々イナテック試作開発部も環境変化に対応すべく変わらなければならない時なのです。

答えは、他社販売も含め、売上高を伸ばすこと、そして売上高が下がった分、製造経費を下げることに。この二つしかないのです。

売上高については、旧AW様のお陰で50年間売り上げを確保できたのですが、これは世間から見るとあまりにも恵まれた環境でビジネスがされていたことだけと考えるべきです。

これからは、他社販売も含め本来の営業活動に変えなければなりません。幸運にも、A/T量産部門はまだ数年は好調のようですので、今までの営業のやり方ではなく、営業戦略を自前で考え、自前で営業活動できる体制を整えていきます。そのためにもイナテックの得意な技術や品質管理を再度整理し、プレゼンする必要があります。

今が正念場です。営業部隊の皆さん、一緒に頑張りましょう。

目標営業利益率以上にする為に逆算で試算(最低でも利益でプライオ)

もう一つは、売上高の減少に合わせて早急な経費を削減することです。その中でも一番大きな経費は労務費です。経費を積上式で営業利益を試算するのではなく、目標営業利益率以

上にするために逆算で労務費を始め経費をいくらにしないといけないのか、その数字にするために何をせねばいけないのかを全員で知恵を絞ることなのです。

ここでも一つ重要なことは、スピードです。遅くなると「死に体」になってしまうのです。

「すぐやる」習慣が、命運を大きく分ける

日本電産会長 永守重信氏

「すぐやる、必ずやる、出来るまでやる」

経営の現場でも、ほかのことがすべてできていても、スピードが遅いだけで大きな赤字を抱えている例も少なくない。

傘下の会社の例で、決断の遅い経営者とスピード感の欠如した社員がただで、赤字が百億円まで膨れ上がってしまった。まさにスピードで勝敗が決まった。

なぜこの会社はスピード感に欠けていたのか。この会社の場合、社長が技術部長を電話で呼び出して、受話器を置いてから五分たつても、十分たつても技術部長は現れなかった。

業を煮やして再び電話を入れると「すぐ伺います」とおっとり答えて、それから五く六分後になつてようやく顔を出す始末だ。

この社風を変革するにはどうすれば良いのか、それは、古参社員が上司から呼ばれたときに走って駆けつける様子を見せれば、誰もが自然と真似るようになる。

経営者やリーダーはこのように人を教育し社風をつくっていくのだ。これこそがリーダーシップである。

イナテックは、70年間苦勞はあつたものの、順調に成長してきました。しかし今、スピード感の欠けたイナテックになりつつあることを真摯に反省し、企業体質と社風を変えていきます。みなさんの理解と協力をお願いいたします。

ゆでガエルになるな

時代の変化に対処せよ

これも日本電産会長の永守氏の著書『成しとげる力』に記載されてみえた文章です。今のイナテックも、大変化を遂げなければならぬ時です。もう一度自分の事として一緒に考え反省しましょう。

ゆでガエルになつてしまふのはどんな人間か。

「六悪」

「マンネリ・あきらめ・怠慢・妥協・おごり・油断」

1. マンネリ

「工夫もせずに前例踏襲ばかりをくり返しては
いないか」

2. あきらめ

「挑戦せずに望みを捨ててはいないか」

3. 怠慢

「やるべきことをおろそかにしてはいないか」

4. 妥協

「これくらいでいいや」と手を抜いてはいないか」

5. おごり

「他人の意見に謙虚に耳を傾けているか」

6. 油断

「気が緩んで再三、ミスを犯してはいないか」

イナテックが、今この「六悪」に気づけばま

だ、間に合うと考えております。今、キャリア採用の人たちと真剣に取り組んでいるイナテック社員の人たちは、少しずつですが変化し、成長してきていると実感しております。だからこそ、この「六悪」を反省し、「すぐやる、必ずやる、出来るまでやる」精神でスピードを上げる時です。

一年後、二年後が非常に楽しみです。また間に合います。

グループみんなで頑張り、未来を勝ち取りましょう。

(引用：永守重信「成しとげる力」)

茶根譚後集

七三

権貴龍驤、英雄虎戰。以冷眼視之、如蟻聚羶、如蠅競血。是非蜂起、得失蝟興。以冷情當之、如冶化金、如湯消雪。

権門貴顕は竜が躍り上がるように、英雄豪傑は虎が荒れ狂うように、互いに竜虎の戦いをして
いる。(まことに壮絶なことであるが)、冷静な目で見ると、蟻が生臭いものに群がり、蠅が生き
ものの血にたかるのと、少しも変わりはない。また、よしあしの議論は蜂の群れのように群がり
起こり、利害得失は蝟の毛のように一斉に起こる。(まことに騒がしい有様であるが)、冷静な
心で対処すると、鑄型に入れて金属を溶かすようで、湯が雪をかき消すようである。(たちまち
に解決することができる)。